

## 骨髓炎に対する高圧酸素療法について

川 嶋 眞 人\* 田 村 裕 昭\* 高 尾 勝 浩\*  
山 崎 康 弘\* 野 村 茂 治\*\* 加 茂 洋 志\*\*  
森 田 秀 穂\*\* 井 原 秀 俊\*\* 上 田 恵 亮\*\*  
林 克 二\*\*

### はじめに

化膿性骨髓炎は、抗生物質の発達した今日であっても、難治性という本質は一向に変わりなく、整形外科領域の大きな課題の一つである。本疾患の治療に局所持続洗浄療法が極めて有効であることは、既にたびたび報告してきた。しかし、諸家の報告や我々の300例におよぶ症例検討からも、現発率を10%以下に下げることがなかなか困難であり、また中には治療に長期間を有する症例も少なくない。

そこで、再発率の低下と治療期間の短縮を期待して、高圧酸素療法(以下HBO)を骨髓炎の治療に応用してみた。

1965年、SlackがHBOを骨髓炎の治療に応用して良好な成績を得て以来、欧米では多くの報告が存在するが、本邦では設備の関係からあまり行われていない。我々はHBOを単独または手術療法との併用療法として骨髓炎に応用してみたので報告する。

### 方 法

骨髓炎に対するHBOは、術前、術後を問わず行い、絶対2.8気圧(2.8ATA)下にて前半30分間、10分間の休憩の後、後半30分間純酸素を吸入させている。原則として連日行い、30回を1クールとしている。

高圧タンクは、川嶋整形外科病院では、ワンマンチャンバーを、九州労災病院では大型高圧タン

クを使用している(いずれも中村鉄工所製)。

### 症 例

1981年より1982年の期間、HBO療法を行った症例で、治療終了後6カ月以上経過したものは、16例である。

症例の内容は、男性12例、女性4例、年齢10歳～74歳(平均44.7歳)、原因別では血行性10例、外傷性6例であった。

罹患部位は、大腿骨7例、脛骨4例、膝関節周辺2例、腸骨1例、腓骨1例、足根骨1例であった。

検出菌は、黄色ブドウ球菌5例、表皮ブドウ球菌1例、緑膿菌4例、結核菌2例であった。

成績の判定は、以下の基準で行った。

良：自覚的、他覚的にも特別な炎症所見がなく、血沈も正常で、X線像でも腐骨の存在や炎症像のみられないもの。

可：手術またはHBOを受けたにもかかわらず、時おり、炎症症状が軽度のみられるが、入院治療を行うほどの必要もなく、治療前に比較して症状の明らかな改善を認めるもの。

不可：明らかに炎症症状があり、引き続き治療を要したもの。

治療成績は良14例、可2例、不可0例で本療法は良好な成績を示していることが判明した。ただし、症例数がまだ少く、手術例単独とHBO併用群、HBO単独群との有意差を示すまでに至らず、今後の検討を待ちたい。

以下に若干の症例を示す。

症例1：G.Y. 18歳男性。右大腿骨骨髓炎。

\*川嶋整形外科病院

\*\*九州労災病院





